

ようこそツルの世界へ！ — 平川動物公園のツルたち —

福守 朗

動物園の役割のひとつとして、生息域外保全がある。これは本来の生息域ではない場所での保全活動のことであり、動物園等での繁殖および個体群の管理・維持がこれに該当する。野生個体群とは別の個体群を適切に維持することにより、感染症発生時などの危険分散となり得る。また、飼育下で得られた知見を生息域内保全に還元することにも寄与する。動物園でのツル類の飼育の歴史は古く、1882年に開園した恩賜上野動物園には当時からタンチョウとマナヅルが飼育されていた。現在国内の動物園では13種のツル類が飼育されている。最も多く飼育されているのはタンチョウの35園180羽で、続いてホオジロカンムリヅル27園67羽、マナヅル18園27羽の順となる。一方で飼育羽数が10羽に満たないのはハゴロモヅル、カンムリヅル、オグロヅル、ナベヅル、カナダヅルであり、それ以外のソデグロヅル(20羽)、オオヅル(11羽)、ホオカザリヅル、クロヅル(いずれも10羽)も個体群を維持するのに十分な羽数とは言い難く、飼育種の「選択と集中」が課題である。平川動物公園では12種22羽のツルを飼育している。これは国内では最も多い種数であり、園内全飼育種139種の9%、全鳥類43種の28%をツル類が占める特色ある園と言える。これは前身の鴨池動物園時代より、ツルの渡来地である出水市から傷病鳥として平川動物公園へツルが移送されてきた経緯も関係している。過去に11羽のナベヅルが平川動物公園に出水から移送され、そのうち2018年に出水市から移送されたナベヅルの1羽は現在も飼育中である。平川動物公園は1982年に国内で初めてナベヅルの飼育下繁殖に成功している。成功した要因としては、出水市から移送されたまとまった羽数のナベヅルを同じ空間で飼育していたので、相性の良いペアの相手を選択できたことも一因である。出水市のツル渡来地では秋から春までの半年間がツルの観察シーズンであるが、動物園では年間を通していつでも間近で観察できること、他の生き物が目的で訪れた人々にもツルとツルに関する情報を伝えられることが強みである。動物園は「野生への窓」とも表現され、多くの一般市民に対する普及啓発の場となり得る。ツルの渡来地である出水市と連携しながら、平川動物公園でのツルの飼育と普及啓発活動を一層充実させたい。

○ラムサール条約登録記念シンポジウムにて講演

令和4年1月22日(土)

マルマエ音楽ホール出水(出水市主催)